http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.347　18/02/22

チームの力

昨日のザギトワもスゴかったが、スケートの女子団体追い抜きもすごかった。昨日の朝日新聞朝刊の一面に、彼女たちの滑りを正面から捉えた写真が載っているが、正面を見すえる三人の顔と、ちょっとずつ位置の違う手と足を捉えながらも、そこにチームとしての一体感と力強さを感じさせる素晴らしい一枚なので、ぜひ、図書室などで見てほしい。

＊

約20センチ。前を滑る選手との間隔をソチ五輪があった４年前の平均と比較した差だ。日本スケート連盟の湯田淳スピード強化部長は「ソチの時よりも明らかに近い」。メダリストをそろえたオランダと比べて個々の力が劣る日本の強みはそこにある。

この種目は３人が縦に隊列を組み、400メートルリンクを６周する。先頭交代を繰り返すことで選手が受ける空気抵抗を分散し、チームとして終盤まで体力を温存できるかが重要な戦術だ。

連盟の科学班は、風洞実験で選手間隔を95センチにすると２番手の空気抵抗は単独滑走時と比べて50％減、左右に40センチずれるだけで単独滑走と変わらない抵抗を受けることを突き止めた。縦一列で互いの間隔は自分の頭と前の選手のお尻がつくぐらいの１メートルに。選手たちは年間300日のナショナルチーム合宿で取り組んできた。

高木美は言う。「全員の力がなければ成し遂げられなかった」。準決勝を滑った菊池彩花（30）＝富士急＝、元々のメンバーだった押切美沙紀（25）＝富士急＝も加えた計５人の信頼関係も、その距離を縮めた。

リスクもある。押切は2016年８月の練習中に菊池と接触した際のけがの影響で、仲間に引退の決意を告げた。だが、高木姉妹から「今つらいことは来季につながる。一緒に乗り越えよう」と言われた。現役続行を決め、メンバーを外れても仲間を支え続けた。

最年長の菊池は海外遠征中、仲間を焼き肉に連れ出して関係を深め、最年少の佐藤はがむしゃらに先輩についていった。そんな姿勢はチームに活気を生んだ。

高木菜は「押切を含め、みんなが見守ってくれたからゴールできた」。隊列と心の距離を縮めた５人でつかんだ頂点だった。（今日の記事）

＊

教員としてこういう文を読むと、「受験は団体戦」ということを思い出す。もちろん、団体で受験するわけではなく、答案に向かうのは個々人なのだが、その個々人を育てる「団体」が、どれだけ真摯で、どれだけチームワークに富んでいるかによって、その個々人の結果も違ってくるはずだと思うからである。

例えば昨日のＴではないが、文章の「読み」などに関しては、我々教員以上に君たちが素晴らしい視点を提供することもある。そういう友人の、自分には思いつかないような発想・考え方に触れる中で、個々の視野が大きく広がっていき、それが結果として、総合力を試す難関大学の入試の結果に結びついていくのである。多くの授業で、討論をしたり、意見を求められたりするだろう。その時、友だちの素晴らしい発想・考え方を共有することで、「チーム25R」としての力が向上するのであり、それが最終的な個々人の結果へと結びついてゆくのではなかろうか。